

調査書の「指導上参考となる諸事項」の記述についての検討

——パーソナリティおよび学力の 3 要素に関する記述に注目して——

並川 努, 吉田 章人, 坂本 信 (新潟大学)

本研究では、高大接続改革などの状況も踏まえて、現行の高校調査書を対象に、生徒の特徴がどのように記述されているのかを検討した。227 名分の調査書の「指導上参考となる諸事項」のデータから、そこに記載されているパーソナリティに関する記述および「学力の 3 要素」に関する記述に着目をした集計を行った。その結果、パーソナリティでは「誠実性」に関する記述が、全体の 85%と多く見られること、「誠実性」「調和性」「外向性」の 3 因子に言及されるケースが多く見られることなどが示唆された。また、学力の 3 要素については、「知識・技能」に関する記述が多く見られたのに対して、他の 2 要素については 17%程度にとどまることが示唆された。

1 はじめに

1.1 高大接続改革と調査書

「学力の 3 要素」についての多面的・総合的な評価への転換を目指す高大接続改革（文部科学省，2017a）が現在進められている。その中で、調査書等の在り方についても検討が進んでおり、さまざまな改善が図られている。たとえば、調査書の「指導上参考となる諸事項」の欄が拡充され、より多様で具体的な内容が記載される形に改善されるなどしている（文部科学省，2017b）。今後の入試の中で、これらの資料をいかに活用して行くかは、多くの大学にとって喫緊の課題の 1 つであるとも言えるだろう。

では、現行の調査書には、どの程度生徒の（狭義の）“学力”以外の情報、すなわち「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」等に関する情報が含まれているのだろうか。調査書に関する研究は、脇田・北原・小泉・井村・中田（2017）など、近年もいくつか行われている。しかし、主体性や協働性のような、「知識・技能」以外の部分について焦点をあてて詳細に検討したものは、必ずしも多くはない。

そこで本研究では、現行の調査書に、受験生の態度や行動の特徴などに関する情報が、どの程度記載されているのかを、改めて整理・検討することとする。特に、ここでは「知識・技能」以外の部分にアプローチするために、パーソナリティ（人格・性格）に関する研究の枠組みを援用して検討を行う。パーソナリティとは、心理学の分野で「人の、広い意味での行動（具体的な振る舞い、言語表出、思考活動、認知や判断、感情表出、嫌悪判断など）に時間的空間的一貫性を与

えているもの」（神村，1999；686）などと定義されている。この定義自体、非常に幅広いものを含むが、「学力の 3 要素」に含まれる主体性や協働性なども、このパーソナリティと密接に関連するものであると言えるだろう。そのため、パーソナリティに関する研究を援用することで、調査書の情報を分析する際の 1 つの枠組みを提供することが可能になると考えられる。特に、パーソナリティのどのような側面が調査書に記述されやすいのかを整理することができれば、一人ひとりの個人差を理解する上でも重要な手がかりになるだろう。

1.2 本研究の目的

以上のことを踏まえ、本研究では、今後の詳細な検討のための予備的な段階として、調査書に記載されている生徒のパーソナリティに関する情報および「学力の 3 要素」に関する情報を整理することを目的とする。実際の調査書データから得られたテキストを対象として、まず、パーソナリティに焦点をあてた探索的な分析を行う。具体的には、調査書の「指導上参考となる諸事項」欄の記述を対象に集計を行い、（1）どのような単語が多く用いられているのか、（2）パーソナリティのどういった側面・特性に関する記述がなされることが多いのか、について検討する。その上で、（3）「学力の 3 要素」に関する情報はどの程度記述されているのかについても検討を行う。

なお、本研究では、パーソナリティをとらえる枠組みとして、ビッグファイブ（5 因子モデル；Costa & McCrae, 1992；和田，1996 など）を利用する。ビッ

表1 出現頻度の多かった語

語	品詞	男性	女性	計
努力	名詞	122	103	225
学習	名詞	117	107	224
部活動	複合名詞	83	65	148
性格	名詞	76	70	146
強い	形容詞	65	64	129
真面目	名詞	68	56	124
自分	名詞	61	46	107

表2 「性格」と関連する語

	男性	女性	計
穏やか+性格	8	8	16
明るい+性格	10	4	14
優しい+性格	7	7	14
真面目+性格	8	4	12
素直+性格	6	6	12
温和+性格	5	7	12
誠実+性格	4	4	8
温厚+性格	2	6	8
おおらか+性格	3	2	5

グファイブ（5因子モデル）とは、パーソナリティを「情緒不安定性 (Neuroticism)」、 「外向性 (Extraversion)」、 「開放性 (Openness)」、 「調和性 (Agreeableness)」、 「誠実性 (Conscientiousness)」の5つの因子（特性）で捉えようとするモデルである（それぞれの因子の内容については、付録を参照）。研究者によって名称等は異なる場合もあるが、この5因子は、さまざまな国や文化間でも共通して確認されており (McCrae, Terracciano, & 78 Members of the Personality Profiles of Cultures Project, 2005)、一定の信頼性・妥当性が示されている。

2 方法

2.1 分析対象データ

A 大学 B 学部 C 課程の平成 24 年度入試の入学者 228 名（男性 122 名、女性 106 名）の調査書データを用いた。入学者の入試区分ごとの内訳は、推薦入試 40 名、一般入試前期 159 名、一般入試後期 29 名であった。なお、今回対象とした B 学部 C 課程は、特定の免許取得を目的とした課程である。

データは、高校調査書の中の、「指導上参考となる諸事項」の「(1) 学習における特徴等 (2) 行動の特徴、特技等」部分のみを対象とし、第 1 学年から第 3 学年までの記載内容をまとめて分析した。

分析にあたっては、個人を特定できる情報を除いた形でデータ化されたものを利用した。

2.2 分析手続き

2.2.1 分析 1

テキストマイニングツール TTM (松村・三浦, 2014) を用いた分析を行った。まず「真面目」「ま

表3 性格特性の出現頻度

語	頻度
真面目	124
明るい	96
積極的	81
意欲的	66
誠実	62
優しい	59
熱心	53
穏やか	50
温和	48
素直	46
着実	40
前向き	38
温厚	38
地道	31
明朗	30
真摯	30
計画的	27
粘り強い	27
協調性	23
真剣	21

じめ」などの表記のゆれや同義語をまとめた上で、「形容詞」「名詞」に絞って分析を行った。なお、対象部分に記述がなかった 1 名を除き、最終的に分析対象となったデータの件数は 227 件、対象となった単語総数は 8532 語であった。

表4 5因子の記述があった人数と記述例

	記述の あった人数	%	記述例
N 情緒不安定性	2	1%	「情緒も安定しており」「感情の起伏が少ない」
E 外向性	130	57%	「社交的」「明るく」「口数は少ない」
O 開放性	32	14%	「知的好奇心が旺盛」「独創性に富み」
A 調和性	164	72%	「温和で優しく」「素直」「思いやりがあり」
C 誠実性	194	85%	「真面目」「几帳面」「物事を計画的に進める」

2.2.2 分析2

調査書に記述された内容に、ビッグファイブの各因子に関連するものが含まれているか否かを評定した。227名分の記述について、5因子それぞれに関する内容が含まれているか否かを、「記述あり」「記述なし」の2段階で評価した。評価は筆者のうち1名が単独で実施した。なお、記述内容がビッグファイブのどの因子にあたるかは、主に和田(1996)のビッグファイブ尺度に含まれる形容詞(付録参照)を参考にし、判断した。

2.2.3 分析3

調査書に記述された内容に、「学力の3要素」に関連するものが含まれているか否かを評定した。227名分の記述について、それぞれの要素が含まれているか否かを、「記述あり」「記述なし」の2段階で評価した。評価は筆者のうち1名が単独で実施した。

3 結果

3.1 分析1

まず、どのような単語が多く記載されているかについて集計し、表1に出現頻度の多かった語(男女合わせて100件以上のもの)をまとめた。今回対象とした「(1)学習における特徴等(2)行動の特徴、特技等」の部分では、「努力」(225回)、「学習」(224回)、「部活動」(148回)等の語が多く見られた。また、それらに次いで「性格」という語も、146回と多く記載されていた。

次に生徒のパーソナリティに関連するものに絞って集計を行った。ここではまず、係り受け解析を行い、「○○」+「性格」という形で係り受け関係が見られた語を抽出した。表2に、合計で5件以上見られたものをまとめた。ここでは、「穏やか」「明るい」「優しい」などの語が、「性格」と関連して多く抽出され

表5 記述されていた因子の組み合わせ

組み合わせ	人数
外向性・調和性・誠実性	74
調和性・誠実性	50
誠実性	22
外向性・誠実性	19
外向性・調和性	13
外向性・開放性・調和性・誠実性	11
記述なし	8
開放性・調和性・誠実性	7
外向性・開放性・誠実性	5
調和性	4
開放性・誠実性	4
外向性	3
情緒不安定性・外向性・調和性・誠実性	2
外向性・開放性・調和性	2
開放性	1
外向性・開放性	1
開放性・調和性	1

ていた。

また、表2に挙げた9つの語について、パーソナリティのビッグファイブ(5因子モデル)にあてはめて分類を行った。和田(1996)の尺度に含まれる形容詞などを参考に分類した結果、6つが「調和性」、2つが「誠実性」、1つが「外向性」に分類された。

さらに、表3には、出現頻度の多かった語のうち、直接パーソナリティ特性などを表すと考えられるものを任意に抽出し、記載した。表1にも含まれている「真面目」のほかに、「明るい」「積極的」「意欲的」「誠実」などが多く出現していた。

表6 学力の3要素の記述例

記述例	
知識・技能	地道な努力により、基礎知識と学力を幅広く身につけた。 現代社会に興味を持ち、新聞やニュースから知識を得よう努力した。 化学の無機分野においては、化学反応式・周期表などを繰り返し書いて確実に覚えた。 数学が得意で、成績は群を抜いている。
思考力・判断力・ 表現力	疑問点を解決に導く努力を惜しまずに続けたため、考え抜く力が身につけている。 物事に対処するとき冷静に判断し、動こうと努力する。 自分なりの考えをしっかりと持ち、表現することができる。 文章の表現力には非凡なものがある。
主体性を持って多 様な人々と協働し て学ぶ態度	周囲の人の考え、立場をよく理解し、人間関係の中で自分の位置をしっかりと把握し自主的 に行動する。 リーダーとして力を発揮しグループをまとめ、方向性をきちんと示して取り組んだ。 理論に基づいた自分の意志を持ちながらも他人の意見を聞き入れる柔軟な考え方ができる。

3.2 分析2

5因子それぞれに関する記述が、227名中何名の記述に含まれていたかについて、表4にまとめた。最も多くの調査書に記述されていたのが、「誠実性」についての記述であり、227名中85%にあたる194名で見られた。同様に、「調和性」に関する記述は164名、「外向性」に関する記述は130名の調査書に含まれていた。一方で、「情緒不安定性」に関する記述は、2名のみであった。

次に、一人の調査書の中に、どのような因子の記述が組み合わされて含まれているかについて集計した結果を、表5にまとめた。最も多かったのが、「外向性」「調和性」「誠実性」の3因子について言及されているケースであり、全体の約33%にあたる74人で見られた。次いで多かったのが「調和性」「誠実性」の2因子について言及されているケースであり、これら上位2つの組み合わせパターンで全体の55%を占めていた。

また、パーソナリティについて言及されていないケースも8件見られた。これは、当該欄に「大学進学希望」とのみ記載されていたケースであった。

3.3 分析3

最後に、「指導上参考となる諸事項」に「学力の3要素」に関連すると思われる記述がどの程度の割合で含まれているかを集計した。その結果、「知識・技能」に関連する内容が見られたのは、227名中211名分(93.0%)の記述であった。同様に「思考力・判断力・表現力」は39名(17.2%)、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」は38名

(16.7%)であった。なお、表6にそれぞれの記述例を示した。

今回対象とした「指導上参考となる諸事項」欄で、3要素とも関連すると思われる記述が含まれていたのは9名の調査書で、全体の4.0%であった。また、最も多かったのが「知識・技能」に関するもののみが見られた調査書で、146名分(64.3%)であった。また、いずれの要素も含まれないと評価されたのは15名分で全体の6.6%であった。

4 考察

本研究では、調査書の「指導上参考となる諸事項」に記載されている内容について探索的に分析を行い、記述されているパーソナリティ特性について検討を行った。まず、表1に示したように、今回は「努力」や「学習」「部活動」などに次いで、「性格」という語が146回と多く抽出された。1名分のデータの中に繰り返し登場するものを含めて集計してはいるものの、分析の対象としたのが227名のデータであることを踏まえると、高校調査書の「指導上参考となる諸事項」部分には「性格」に関する記載が多く登場していることが示唆される。この点は、大久保(2008)などの結果とも共通する。

次に、係り受け解析の結果からは、「調和性」に分類される語が多く記述されていることが示された。具体的には、「穏やか」「優しい」「素直」「温和」「温厚」「おおらか」の6つであり、「〇〇な性格」という記述の際には、調和性に関するものが多いことが示唆された。また、分析2の結果(表4)からは、「誠実性」に関する記載が全体の85%と非常に高い

割合で見られることが示された。誠実・勤勉であるという特徴は、調査書において望ましく、記述されやすいものであることが示唆される。さらに、「外向性」「調和性」「誠実性」の3因子が組み合わせられて記述されているケースが、最も多く見られた(表5)。これらは「温厚かつ誠実な性格であり」や「明るく、優しい」などのように、並列的にまとめて記載されるケースも多く、調査書に記載されやすい側面であると言える。

一方で、「情緒不安定性」や「開放性」についての記載は、相対的に少なかった。今回は、ビッグファイブ尺度(和田, 1996)の形容詞をひとつの基準にしていたため、抽出されにくかった可能性もあるが、これらは調査書では直接的に言及されにくい側面であるとも考えられる。特に「情緒不安定性」は、和田(1996)の尺度でも「情緒不安定性」の高さを示す、いわばネガティブな方向性の項目のみで構成されているように、ポジティブな方向性での記述がしにくい面がある。一般的に、調査書は、生徒の長所を取り上げることが多いと考えられるため、今回の結果ではあまり多く抽出されなかったと推測される。

なお、「外向性」については、「口数は少ない」「寡黙」など「外向性」の低さを示す(ネガティブな方向性とも言う)記述も一部で見られていたが、「調和性」と「誠実性」は、いずれも基本的にその高さを示す記述であった。そのため、言及されやすい「調和性」や「誠実性」についての記述がない場合の意味についても、今後検討していく必要はあるかもしれない。

分析3では、「学力の3要素」についても探索的に検討を行った。その結果、「指導上参考となる諸事項」欄において、最も多く読み取れるのは「知識・技能」に関する生徒の様子であり、「思考力・判断力・表現力」や「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」に関連すると思われる記述は、相対的に少ないことが示唆された。今後の入試においては、多面的・総合的な評価として、この「思考力・判断力・表現力」や「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を調査書からある程度評価することが求められるようになってくると考えられる。しかしながら、今回対象とした範囲では、これらの要素は必ずしも多く記述されていたとは言えず、今後どの程度記述が充実してくるのが大きな課題であると言えるだろう。また、新たにそれらに関する記述が増えたとしても、それを評価する枠組みをどのように構築するかも難しい課題であると言える。

5 本研究の限界と課題

本研究では、調査書に記載されている生徒のパーソナリティや学力の3要素に関する記述について、一定の整理はなされたものの、課題も多い。まず特定の年度・大学・募集単位の入学者の調査書データのみを対象として分析を行ったため、今回得られた傾向はこの年度や学部特有の性質を示している可能性がある。さらに、今回行った分析自体も、形容詞・名詞のみを対象とした極めて機械的で表面的なものにとどまっていたり、評価者1名での集計であったりと、必ずしも洗練されたものとはなっていない。また、調査書を作成する教員個人や、高等学校、都道府県などの特徴も、記載内容に影響を与える可能性があるが、それらについても今回は扱うことができていない。他にも、表1, 2では男女別に集計を行っているが、それについても十分に検討ができていない点も課題であると言える。

また、今回は大学に出願書類の1つとして提出された調査書のテキストデータから分析を行ったが、高校教員が調査書の作成を行うプロセスなど、異なる視点からの検討も必要になってくると考えられる。たとえば、市販されている調査書の記入法や文例に関する書籍(宮崎・小泉, 2013)では、コミュニケーション能力や積極性、協調性などが調査書記入におけるポイントとして挙げられている。また、性格・行動を表す慣用表現として「明朗活発である」「温和である」「責任感が強い」(p.162)など、今回のデータでも多く見られた表現も複数例示されている。そのため、こういった資料において、どのような例が多く挙げられているか等を整理することも、調査書の記述内容を評価する際の手がかりになりうると思われる。

今後は、本研究で得られた知見をもとに、さらに上に挙げたような幅広いデータを対象にして、より精緻な分析を行って行く必要がある。また、選抜の資料として用いる以上は、そこに記述された内容やそこから読み取れる事柄が、入学後の学生の学修行動や、成績とどのように関連しているのかといった視点も重要になってくると考えられる。今回は調査書の記述内容のみに焦点を当てたが、この点についても今後検討が行われる必要があるだろう。

引用文献

Costa, P. T., Jr., & McCrae, R. R. (1992). *Revised NEO Personality Inventory (NEO-PI-R) and NEO Five-Factor Inventory (NEO-FFI) professional manual*. Odessa, FL: Psychological

Assessment Resources.

神村 栄一 (1999). 「パーソナリティ」中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榎算男・立花政夫・箱田裕司編『心理学辞典』有斐閣, 686-687.

McCrae, R.R., Terracciano, A., & 78 Members of the Personality Profiles of Cultures Project. (2005). Universal features of personality traits from the observer's perspective: Data from 50 cultures. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 547-561.

松村 真宏・三浦 麻子 (2014). 『人文・社会科学のためのテキストマイニング (改定新版)』誠信書房

宮崎猛・小泉博明 (編) (2013). 『改訂生徒指導要録・調査書・推薦書記入法と文例集』 小学館

文部科学省 (2017a). 高大接続改革<http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/index.htm> (2018年12月1日)

文部科学省 (2017b). 平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/07/_icsFiles/afieldfile/2017/07/18/1388089_002_1.pdf (2018年12月1日)

大久保 敦 (2008). 高校調査書及びアドミッションポリシーで重視される内容の比較— 高校調査書「指導上参考になる諸事項」に記載されている内容の分析から— 『大学入試研究ジャーナル』, 18, 31-36.

和田 さゆり (1996). 性格特性用語を用いたBig Five

尺度の作成 『心理学研究』, 67, 61-67.

脇田 貴文・北原 聡・小泉 良幸・井村 誠・中田 隆 (2017). 大学入学者選抜における調査書活用に向けた課題—記載ルールの必要性 『平成29年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 (第12回) 研究発表予稿集』, 72-77.

謝辞

本研究は、JSPS科研費 JP16H02051 の助成を受けたものである。

付録 和田(1996)のビッグファイブ尺度に含まれる形容詞

因子	含まれる形容詞
N 情緒不安定性	悩みがち, 不安になりやすい, 心配性, 気苦労の多い, 弱気になる, 傷つきやすい, 動揺しやすい, 神経質な, 悲観的な, 緊張しやすい, 憂鬱な, くよくよしない
E 外向性	話し好き, 陽気な, 外向的, 社交的, 活動的な, 積極的な, 無口な, 暗い, 無愛想な, 人嫌い, 意思表示しない, 地味な
O 開放性	独創的な, 多才の, 進歩的, 洞察力のある, 想像力に富んだ, 美的感覚の鋭い, 頭の回転の速い, 臨機応変な, 興味の広い, 好奇心が強い, 独立した, 呑み込みの速い,
A 調和性	温和な, 寛大な, 親切的な, 良心的な, 協力的な, 素直な, 短気, 怒りっぽい, とげがある, かんしゃくもち, 自己中心的, 反抗的
C 誠実性	計画性のある, 勤勉な, 几帳面な, いい加減な, ルーズな, 怠惰な, 成り行きまかせ, 不精な, 無頓着な, 軽率な, 無節操, 飽きっぽい